



▲ 福地一JFSC会長(左)と池上徹彦宇宙開発委員会委員長(右)

宇宙開発委員会 委員長 池上徹彦

このExecutive Commentは、宇宙開発委員会委員長の池上徹彦氏に、JFSC福地一会長(首都大学東京システムデザイン学部学部長)がインタビューした内容をもとに作成いたしました。

1. 日本の宇宙開発の現状と将来目指す方向

福地:まず、日本の宇宙開発の現状と今後どのような方向を目指すべきかについてお聞かせください。

池上:今、海外から見て日本の宇宙開発で非常に高く評価されているのは国際宇宙ステーション(ISS)への貢献ですね。ISSは御承知のように5つのパートナー、NASA、ロシア、JAXA、カナダ、ESA とプラス10カ国の計15カ国で運営されていますが、キーとなっているのは前述の5つのパートナーです。そこでの日本の活躍が海外から一番見えているのではないのでしょうか。日本の実験モジュール「きぼう」が注目されています。特に暴露部が期待されている。この暴露部の発想は、もともと電波研究所(現(独)情報通信研究機構)の発想でしたね。当初、アンテナをたくさんつけるというアイデアだったけど、アンテナ動かすとISS本体が動いちゃうという問題があったので実現しなかった。このISSに関して、アメリカは、オバマになって2016年以降どうするかという議論になって、結局続けるとなった。宇宙開発委員会でも私が主査をした特別部会でとことん議論して、日本としても続けようとなった。この議論の過程で、当初ISSというのはいまうまく使いきれないのではないという意見が多かったが、色々議論してみると、そうではなくなってきた。当初期待されていた半導体、材料関係の研究で無重力というのは、あまり面白いものにはできそうもなくなった。ただ、分子の多い有機物の分野ではいろいろ無重力でやってみたいという希望が多く出されてきた。特に、生命科学、製薬では面白いかもしれない。たしかに、ISSでの実験応募や提案は生物科学が多くなってきた。

ゲノムも一段落して、つぎはタンパク質という流れのようですね。

おっしゃる通りで、タンパク質のつぎは生きものになるわけで、生物学、生命科学の分野で宇宙環境に関心もたれている。生物体の変化を重力を変化させて見てみようという発想ですね。分子構造が複雑なものは、わずかな重力の違いで影響があるらしい。もちろん地上でも実験できるらしいが、宇宙と地上の実験を相補的に進めることが有意義らしい。

日本の宇宙開発の現状のもう1つは、日本の推進技術ですね。日本は宇宙に重量物を持ち上げる基幹ロケットを独自開発で持っていて、最近では、H2ロケットを20回打ち上げて、失敗は1回だけです。

国が力をいれてやってきた成果ですね。その一方で、固体ロケットも独自に開発してきました。今後も、小型の固体ロケットのイプシロン技術も計画からの遅れはあるけど継続させる。つまり、液体ロケットも固体ロケットも技術開発を進めていく方針です。さらに、推進系とっていいかわからないが、ものを運ぶという点からすると、HTV(こうのとりの)が2回成功しています。これは世界にも誇れるたいしたものですね。このように、推進系は推進系でこれまで、頑張った成果として結実している。ただ、今後推進系について新しいものを、どうするかは十分議論する必要がありますね。世界には大気を突き抜けて宇宙空間にいけるロケットは潤沢にあるので、日本が推進系としてどういう特徴をもたせるかは大事な点でしょう。

人工衛星本体について言うと日本は遅れてしまった。これには理由があって、1989年の日米合意、スーパー301の影響でしようがなかった。商用の人工衛星を国が開発できなくなってしまった。そこで、研究開発の名目で人工衛星開発をやってきた。実は、外国からは、宇宙の研究開発でこんなに幸せな国はないですねといわれる。日本は、約1000億円を宇宙の研究開発につぎ込んでいるというわけですね。ただ、人工衛星の国際競争力という点ではいまいちですね。どうしてもH2ロケットに合わせて人工衛星を開発するので、大きな人工衛星になってしまう。人工衛星のコマーシャルの分野にうち出していく衛星技術はまだ未熟ですね。

宇宙科学について日本は非常に良くやってきたと思います。ある意味では贅沢に、研究者のアイデアを生かして、研究者がやりたいことをやってきた。ただ、日本は今までバブルだったのでやってこられた面もあります。「はやぶさ」にしたって、「かぐや」にしても少ない人数で比較的大きな予算をつぎ込んできたし、そのような例は海外にはないのではないのでしょうか？その点では、外国からみると日本の宇宙科学者はうらやましがられているのではないかと思います。外国では、宇宙科学をやろうとするとたいてい国際協力です。日本は比較的独自にやってきている。そういう意味で、日本の宇宙科学研究者は幸せで、もちろん成果も十分あげていると思います。

宇宙科学といえば、先日、川口淳一郎先生に大学にきて講演してもらいました。学生達は大変喜んでいましたね。「はやぶさ」現象というか、若い人から中年まで共感を呼んだという現象、あれは、日本全体を元気づけたような気がします。宇宙開発の違う効用をみたような気がします。

「はやぶさ」は、失敗を克服して帰ってきたということに感動しましたね。サイエンスの点でいえば、ものすごい成果かというはまだわからない。日本を元気にさせたという効果は大きいでした。私は、日本も日本人を火星におくろうという壮大な計画を打ち上げたい。そして、これを総理大臣に言わせたい。こういった壮大な構想は、科学者、技術者だけではでこないような気がする。政治という要素があるんだろうな。落ち込んでいる日本を元気にさせようというのも国の大事な政策だと思うが、今回の「はやぶさ」は、そこにうまくはまった。宇宙開発というのは、日本の国の色々な政策の側からみて宇宙をどう使うかという視点が必要だが、「はやぶさ」みたいなのがあった方がいいね。宇宙開発の効用として、細かなサイエンスの成果とは別な国を元気にする役割という点も大事にしたいですね。

「はやぶさ」も、ノーベル賞の2人受賞もそうですが、国を国民を元気にさせるというのも科学技術の重要な意義ですね。

そうだけど、はたして日本の研究者達は、そう考えているかなあ。どちらかというと、ネイチャーの論文のほうが大事とおもっているのではないのでしょうか。本来、科学技術は歴史をみると、イギリスにしろ米国にしろ国民やパトロンからの支持がベースにあった。例えば、米国のJPLがやったことは、ボイジャーで惑星の写真を次から次へと撮ってそれをデジタルで送るということをやった。論文書くのが目的なら面白い領域だけをピンポイントで観測すればすみますよね。そうせずに、写真を撮りまくった。写真だけで論文にはならないのだが、あれだけたくさんの写真をとって公開するというのは、科学技術にパトロンが必

要だという認識があるのではないのでしょうか。そのパトロンは国民だとわかっているのではないのでしょうか。ハッブルだって、宇宙空間の一点を狙えば論文はかけるだろうけど、きれいな写真を撮り続けている。論文を書くという点では回り道をしているかもしれないが、長い目でみれば研究成果の創出につながっている。日本はそういった長期的な戦略に欠けるような気がしますね。

2. 日本の有人宇宙活動について

日本の宇宙開発における有人宇宙活動のありかたはどう思われますか？最近のニュースで、若田さんがISSの船長になると報道されていましたが、タイムリーでいいニュースでしたね。

ISSのコマンダーですね。私にも大変うれしいニュースです。NASAからは日本の宇宙飛行士が非常に高く評価されていますね。日本の宇宙飛行士は、もともと優秀で、宇宙への思い入れが非常に深い。高く評価されて当たり前です。

差し支えない範囲でいいのですが、日本として何か選挙運動みたいなものをしたのでしょうか？

JAXAは運動してないのではないかな。そういう運動がへたなのがJAXAでしょう。単純に、若田さんの実力でしょうね。JAXAはもっと、日本の良さをもっとアピールしてもいいけど、概してJAXAは下手ですね。国際の舞台でどう振舞ったらいいかという点では今一步ですね。私はたまたま光通信の分野で世界と競争しましたが、私は感覚的に、そんな感じがしますね。一步先、あるいは二歩、三歩先をみて振舞うというのが苦手ですね。アメリカでJAXAの誰かが記者会見やった時に、「やっとこれで世界と同じテーブルについた」という発言をした。事実そうかもしれないけど、もうちょっと「日本の実力からすれば当たり前ですよ」ぐらいの主張も必要じゃないかな。なにもJAXAだけに限らず日本の外交全体に言えるかもしれないですね。

有人宇宙活動は、本来は政策、政治の要素を含んでいます。科学者だけに議論させることは入り口がまちがっていて、もう少し広く議論をしないとイケない。

有人宇宙活動に関してですが、日本の有人宇宙活動は、なかなか議論できない。これは理由があって、これまでの私の霞が関の経験でいうと、行政サイドで議論するのは無理だと思いません。日本の場合は予算の話になると、なんぼかかるという話になって、議論が先にいかない。有人宇宙活動は、本来は政策、政治の要素を含んでいます。科学者だけに議論させることは入り口がまちがっていて、もう少し広く議論をしないとイケない。ヨーロッパの連中と2年くらいまえに議論したんですが、有人宇宙活動に関しては、倫理(Ethic)という人間ってなんなのというレベルから議論する必要あるっていうんですね。今、日本でもそれをやろうとしている。最終的には惑星に行こうとかね。

人類もいずれは地球からでなければいけないですからね。

欧米の連中はそう思っている。それは理由があって、20万年前に人間の原型がアフリカに生まれて世界中に散っていった。それは、アフリカが砂漠化して移動せざるをえない。そこで世界中にちっていった。彼らには、自然環境変化は当たり前。他方、日本は自然環境理由でだめになった経験がない。土も森も潤沢。日本では土は50mくらいあるけど、ヨーロッパは穴ほれば1m位で岩石にぶつかり、これはすぐだめだという発想になる。世界中の宇宙開発をやっている国のトップや研究者が将来宇宙にでていくという発想を当たり前と思っている。あるいは、それを目標にあげている。例えば、火星にいくという発想、いけるかどうかは別として。最近のモスクワで進められている、火星への旅を想定して隔離した空間の中に6人が520日滞在するというのがあります。つい最近のニュースで[ついに火星着陸・・・？朝日新聞2011年2月22日]、2月12日に、シミュレーションですが火星に降りたと報道されていました。その日に、実験に参加しているロシア、ヨーロッパ(ESA)、中国の旗を掲げたようですが、中国が入っているのになぜ日本

はっていないのか？非常に私は残念に思いました。日本にも提案があったけど、JAXAは予算がなくて断つたらしい。こんなのは私にひとこと言ってくれれば賛成したのに。やはり縦割りの弊害があったのではないかと。有人宇宙活動は、世界で共同作業としてやろうとした時の、共通のターゲットが必要です。日本が仲間外れにならないように。日本国民が全体としてそういった夢をもてるのが大事だと思います。実はこのような検討は、あまり予算かからない。日本の場合、ロケットやるにしろ、なにをやるにしろ、応用第一とするとなかなかいいテーマがない。でも、遠くにターゲットを置くと、一本の線がみえてきて、有意義なテーマがでてくる。そうすれば、研究開発費も無駄遣いにならない。こういった長期的で壮大な構想は、霞が関に期待してもだめで、役人がだめだというのではなくて、役割が違うのです。こういう話は国民の理解が大切であり、政治家の仕事ですね。アメリカもそうですよね。

3. 日本の宇宙開発における宇宙科学と宇宙工学のバランス

歴史を振り返ると日本の宇宙開発は宇宙科学研究所(ISAS)と宇宙開発事業団の2本柱でやってきましたが、JAXAになって1つの組織になりました。そこで、宇宙開発における宇宙科学と宇宙工学のバランスについてどうお考えでしょう。

これはむしろ、ISASの中の問題だと思います。私もこの立場になってわかったのは、日本の宇宙開発は1950年、1960年くらいから始めているが、エンジニアがずっとやってきている。その中でもロケットの研究開発をずっとやってきている。ですから今60歳以上の人たちはみんなロケット大好きですよ。日本の宇宙開発の最初はサイエンスミッションというよりは、どちらかというと、例えば悪いけどロボコン的な発想が基本にあったのではないのでしょうか。それは無視できないし、工学的な視点は重要です。衛星打ち上げるにも、宇宙飛行士を飛ばすにもエンジニアリングは不可欠です。科学者と工学者が双方が知恵出して組んでやっていくのが必要です。ISASは大学の共同利用機関であり、理学、工学が混じっている。子供がなぜ宇宙が好きか？星を眺めるのが好き(理学)とか、ロケットを作りたい(工学)というのがある。若い人を鼓舞するにはその両方がなくてはだめ。最終的には予算の制限があるから、国際協力なのかで双方がうまくやっていく必要がある。高い目標を掲げて、世界と協力するというのが基本でしょう。

4. 学生など若者にひとこと

日本の学生さんなど、若い人達へのメッセージを何かいただけませんか？

人類はいずれ地球を離れるという発想。案外、若い人はそういう発想をもっているのではないのでしょうか？若い人は、色々な制約にまだしばられていませんから、発想が素直で素晴らしいと思う。

私は、今、航空宇宙の学科にいますが、若い学生さんは宇宙に夢や関心をもっていますね。もっとも、そういう若者が航空宇宙という学科をめざすのでしょうか。

私は、国際宇宙航行アカデミー(IAA)の国際会議に学生達を連れて行った経験があります。そこに参加した学生たちは本当に宇宙大好きという感じでしたね。また、私は会津大学の学長もやっていたので、画像処理という名目で「はやぶさ」にのせられた「いとかわ」の画像作りのプロジェクトをやりました。「いとかわ」のイメージ作りも成功したのですが、すばらしいソフトウェア関連の教育ができたと自負しています。自分達で仕様を作って、最終成果も実感できるという首尾一貫のカリキュラムにしました。これが今では、会津大学の教育の1つの売りになっているんです。大学の教育の活性化という点で、精密工学の分野でも、ソフトウェアの分野でも目標をもつことは大事で、その点で宇宙は良い分野だと思います。宇

宙のためという学生も一生懸命やる。日本の大学は知識だけを付与しようとするからだめで、スキルを高める機会を提供してあげるといことも大事ですね。そういった意味で、教える側からも宇宙は良い例だと思います。問題は、宇宙だけでは就職口がたりないかもしれない。でも、宇宙でとことんやった学生は、他分野への応用もきくし、少しぐらいの失敗にもめげないのではないでしょう。

5. 宇宙基本法と宇宙基本計画の効果

宇宙基本法と宇宙基本計画が与えた影響はどう評価しますか？

今のところは、あまり効果がでていない。宇宙基本法の基本的発想は、自民党も公明党も民社党も一緒だったが、日本の宇宙開発を応用側にシフトしようというものでした。その最右翼でいえば国防ですね。産業振興や環境問題も後押しをしてくれたと思います。私は宇宙開発委員会の委員長になる前から宇宙開発は応用を前提に進めるべきと言ってきました。でも、応用にシフトしてみようとしても、日本の中で議論していると、宇宙の応用って良くわからない。例えば、畚野さんの熱帯降雨観測プロジェクトの成果は米国では評価されても日本の中であまり評価されていないし、日本の中であまり知られていない。後付けかもしれないけど、日本は地上システムが良く出来ていて宇宙の応用に関心がないのがむずかしい理由のひとつです。少ない成功例としては、衛星通信・放送があります。宇宙からの放送ができて放送のデジタル化も加速され、それにつれて大型のフラットパネルディスプレイも開発も加速された。それに比べると衛星を使った携帯電話はまだポピュラーになっていない。その理由は地上システムでできてしまうから。でも実は今、宇宙を使った携帯電話会社が元気になっているんですね。その理由は中近東にあります。戦場ではたしかに光ファイバ通信だけでいいとはならないでしょうね。戦場での利用は残念な話ですが、複雑な国際関係のなかで、最後は人間のつながりやそこから生み出されるインテリジェンスが非常に重要となってきています。自然災害への対応も考えると、衛星をつかった携帯電話は重要になると思う。

最後は人間ひとりひとりが重要で、それらをつなぐという発想が重要です。今の時代は国防についても大事なものはインテリジェンスです。

イリジウムがまた復活したのは戦争もその要因らしいですね。

最後は人間ひとりひとりが重要で、それらをつなぐという発想が重要です。今の時代は国防についても大事なものはインテリジェンスです。言葉が悪いがスパイの技術ですね。無人の強力な兵器はいくらでもあり、間違えると世界大戦がおきるかもしれない。間違いを起さないためにローカルな情報がますます必要になっています。

最近のニュースでは、7月をめぐりに宇宙政策の見直し検討がされるということでしたね。その中に、宇宙庁の設立のことも報告されると聞いています。

宇宙庁の話は、宇宙開発委員会とは別の内閣官房で議論しています。宇宙開発をどうするかという技術的な側面は宇宙開発委員会。幸か不幸か、かつては内閣府にあったのですが現在は宇宙開発委員会は文部科学省にあるので、日本全体の政策を決める役割はありません。逆にいうと自由がある。自由に技術的なところで議論ができる。宇宙開発戦略本部は「戦略」なので、技術の細かい議論はできない。技術的な側面を検討できるのは、宇宙開発委員会だけです。宇宙開発戦略本部はそれを参考にして戦略を作るという役割分担になっています。ISSの議論の中でも将来の有人宇宙活動の深い議論は、宇宙開発委員会で行いました。宇宙開発戦略本部もそれを受けて、有人宇宙活動にも言及できたはずですが。

宇宙基本法、宇宙基本計画の効果はこれからということですね？

そうです。宇宙基本計画も随時見直しがかかります。

6. ナショナルセキュリティと宇宙開発

昔、私が電波研究所にいたころに比べると宇宙通信の分野は元気がないような気がします。我々の仲間の議論では、通信のビジネスが光ファイバや地上無線通信に席卷されても、ナショナルセキュリティの分野では宇宙通信や宇宙からの地球観測は不可欠で、インテリジェンスの要だと考えています。ところが、ナショナルセキュリティについて。日本はなかなか議論しにくい印象をもちます。警察も防衛省も宇宙の活用という発想はあまりないのではないのでしょうか？ナショナルセキュリティと宇宙開発の関係についてどのようなお考えをもっていますか？

防衛省も、実際は宇宙通信使っているが、みずからが開発しようとはしないですね。たとえば、南極観測船の「しらせ」も海外の宇宙通信システムを使っている。それをどうみるかですね。自治体でも、新潟の震災のとき宇宙通信が役立ったのだが、それも海外のシステムを使っているらしい。

それはNTT OBとしては忸怩たるものがあるのでは？



スーパー301の影響をうけNTTはク

レー社のスパコンを購入しました。また、NTTは通信衛星の研究は中止になりました。そこで衛星通信は日本に定着しなかった。しかし、国際関係に強い郵政省はしたたかで、アメリカ上空にも静止衛星位置を獲得していました。このお陰でスカパーJSATはアメリカの企業と組んでアメリカ向けのサービスもしている。今は、静止軌道上の衛星数密度あげられるかも知れないが、軌道位置の確保は途上国との関係もあり大変難しいと思う。

いずれにしても、衛星通信・放送については衛星なしではだめですね。あと、あたらしい時代を特徴づけるのは、インターネットです。エジプトやチュニジアの例、あれだって元はと言えば、僕がNTT時代に奮闘した光通信があつてのもの。会津大学の学長だったのでソフトウェアにも関心あるけど、インターネットはノーベルが発明したダイナマイトと同じで、明るい面、暗い面があつて、そのインパクトはものすごく大きい。いずれにしても今では世界中がインターネットなしでは動けない。もう1つは、衛星からとった地上の写真、イメージングですね。グーグルもさることながら、衛星からとった写真というのは、インターネットと同様に、社会にとって非常に重要な意味をもっていて、ある意味の抑止力を作り出しています、グーグルアースのようにエンターテインメントの面もあるが、グローバルセキュリティの面もあります。これも衛星なしでは実現できませんね。

我々も議論していますが、ナショナルセキュリティは、攻撃や侵略といった攻めの内容と思われがちですが、別の見方をすれば、人を殺さないための技術とも捉えることができます。新しい宇宙通信、宇宙からの地球観測で、抑止力の醸成だけでなく、必要のない殺戮をなくすという発想ですね。日本としてインテリジェンスを含めて、警察、防衛分野での宇宙技術の開発と利用を堂々とやる必要があるのではないのでしょうか。

その通りで、今後のナショナルセキュリティにインテリジェンスは不可欠ですね。複数の国の存在を前提にすると戦争は起きるが、その場合でも一般市民はまきこまないことが大事、そのためには、イメージングとインテリジェンスが重要でしょう。米国も宇宙防衛に関するレポートが1月に出っていますが、宇宙空間のデブリの話が載っています。2万個以上の人間が作った宇宙空間の浮遊物のために、宇宙も安全な場所ではなくなっているという問題提起でした。

情報収集衛星(IGS)は宇宙開発委員会の所管外ですか？

内閣官房ですね。それについては私はコメントできない。日本の国益に貢献しているはずです。

7. 宇宙開発に関するアジアの国々との連携

池上先生は、アジア太平洋地域宇宙機関会議(APRSAF)のジェネラルチャアも務めておられますね。私の大学は東京都がスポンサーですが、東京都はアジアとの友好、連携を重視していて、アジアから優秀な学生を大学に招へいするというプログラムが動いています。宇宙開発におけるアジアの国々との連携の意義についてどうお考えでしょう？

今、宇宙応用という観点からすれば、これから先10年くらいの間に、人工衛星がだいたい1200個くらい必要といわれています。このなかで、開発途上国が自ら人工衛星を打ち上げたい、自ら人工衛星をもちたいというニーズが高まっています。それは、防災とか国境監視とか、国のナショナルセキュリティのためもあるし、eラーニングや遠隔医療といったソーシャルセキュリティのためでもあります。例えば、インドも、またたくさんの島を有するインドネシアにしても人工衛星を教育や医療サービスに使えば、国力を一層上げることが可能です。そこで当然、アジアの国々は自分の人工衛星をもちたいとなります。その時、日本がどうアジアを支援するかが問題ですね。概して日本は東南アジアに関心がありません。また、研究者は東南アジアを下にみている傾向がある。これは実はとんでもないことなんですね。JAXAも、私に言わせると東南アジアの国々を、一段したに見ているように感じます。これは、JAXAに国際的に活躍しているスタッフが少ないということだと思います。東南アジアの国々は、いずれ自分達で宇宙開発技術、そして人工衛星を持ちたいのだが、中国か日本か、どちらに学ぼうかということを考えていると思います。正直なところ21世紀の総合力では中国のほうが上と思われれます。欧州の関係者と議論すると、日本に今大事なことは中国にキャッチアップしていくことだといわれます。ある意味であたっているかもしれない。アジアの国々が日本と中国のどちらを選ぶかというときに、やはり日本がたよりにされたいと願います。日本が弱いのはアジアの途上国が何を望んでいるかに無頓着なことです。彼らが一番期待していることは人材育成です。時間はかかるかもしれませんが、宇宙開発を支える人材をきちんと育成することが大事です。かつての日本の昔もそうだったでしょう。このことは日本の大学にその責務があると思います。東南アジアから学生を呼んで日本の大学で宇宙技術を学ぶという発想ですね。ですから、福地教授は大いに頑張るべきですね。

日本が弱いのはアジアの途上国が何を望んでいるかに無頓着なことです。彼らが一番期待していることは人材育成です。時間はかかるかもしれませんが、宇宙開発を支える人材をきちんと育成することが大事です。

東京都がアジアに着目しているのも良いと思いますね。大学でなくて、JAXAがやるという発想もあるのですが、JAXAだとやはりアジアの人材育成だと、メインではなくてサブの仕事になってしまう。JAXAの筑波にトレーニングを頼んでも彼らは関心がありません、そこでISASにまかせちゃう。ISASも人がいなくて、忙しすぎて人材育成がないがしろになっちゃう。というわけで、日本は宇宙開発のアジア人材の育成という点で遅れていますね。やるべきことの例では、前述の日本が評価されているISSの活動のアジアとの橋かけ役というのがあります。ISSは、日本が国の意志が独自の判断で活かせる重要なプロジェクトです。

そのISSの実験室、きぼうでアジアの国々とコラボレーションをやればいいと思いますね。ただ、残念ながら、少なくともJAXAにはその余裕がない。

JAXAに余裕がないのはなぜでしょう？人数がたりないのかな？

多くのやるべき仕事をこなすには人数はたりないですね。これまではよくやってきた。宇宙基本計画をみてもやることがいっぱいある。結果的にどうなるかというと、予算がないので、予算欲しさに国の方しか向かなくなり、官僚的になってしまう。これは過去10年間のNASAも同様でした。JAXAも今は文部科学省に金よこせという主張だけで、何をやるべきかという点の議論がたりないと思います。金と時間があれば、何でもできるという容易な発想に、私はのりません。なにをやるべきか、どう技術開発を進めるか、また、国民の理解をいかに得るかを、JAXAでも真剣に議論する場を作ることも、宇宙開発委員会の使命と考えていますのでよろしく。

いずれにせよ、日本もアジアも若者の教育って大事ですよ。是非、頑張ってくださいね。

インタビューの日 : 2011年2月21日

インタビューの場所: 文部科学省 宇宙開発委員会 委員長室